

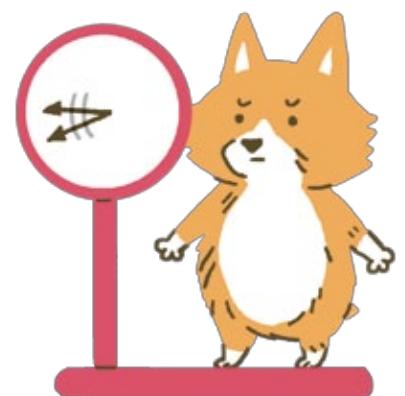
愛犬が異常に水を飲む。頻繁にトイレに行ったり、おしつけの量が増えた。
そんな症状に気づいたら、すぐに動物病院へ連れて行きましょう。

「多飲多尿」や「頻尿」は、泌尿器や内分泌系(ホルモン)の病気の可能性があります。

「水をたくさん飲む」

代表的な生活習慣病、犬にも増加中

糖尿病



「糖尿病」は、膵臓から分泌されるインスリンの分泌量が低下したり(インスリン依存性)、十分に効かなくなったり(インスリン抵抗性)で、糖分を細胞内に取り込めなくなり、血液中の糖分(血糖値)が異常に高くなつて起ります。その他、クッシング症候群が原因で、高血糖になるケースも見られます。

初期には、血液中の大量の糖分を排出しようと、おしつけの量が増え、失われた水分を補うためにたくさん水を飲むようになります。また糖分が正常に利用されないため、食欲は旺盛なのにやせできます。進行すると、嘔吐や下痢、意識障害なども見られ、命に関わります。

主な治療は、血糖値のコントロール。膵臓のβ細胞が破壊され、インスリンを十分に作れない「インスリン依存性」の場合は、一生、インスリンを毎日注射し続けることになります。一方、インスリンは分泌されないので、肥満やストレス、慢性的な炎症疾患などで、効き目が悪くなつて、「インスリン抵抗性」の場合は食事療法による体重コントロールや血糖降下剤の服用だけで改善する」とも。また、クッシング症候群が原因なり、その治療を行います。

糖尿病の予防には、愛犬を肥満させない・ストレスのない生活環境づくりが基本です。

多飲の目安
1日の水分摂取量が体重1kg当たり
100cc以上(食物中の水分も含む)



単なる肥満や老化と間違えやすい
クッシング症候群
(副腎皮質機能亢進症)



副腎(腎臓の近くにある左右一対の臓器)は、脳下垂体からの指令により、コルチゾールといふ副腎皮質ホルモンを分泌しています。脳下垂体や副腎に腫瘍などの異常があり、副腎皮質ホルモンが過剰分泌されて起る「クッシング症候群」で、高齢犬に多く見られます。症状は、多飲多尿、食欲増進、左右対称の脱毛、お腹が膨れる、筋力が低下して動きたがりないなどです。治療は薬物療法が中心ですが、副腎腫瘍が原因の場合は外科手術を行つとともに。また、クッシング症候群には医原性のものもあります。アレルギー疾患等による長期の副腎皮質ホルモン(ステロイド剤)の投与で起ります。

尿崩症 子宮蓄膿症

「多飲多尿」の典型的な病気の一つ



慢性腎不全

適切な治療とケアで長生きすることも可能

大量のおしつけをし、水をガブ飲みし、水が飲めないと簡単に脱水症状を起こすのが、「尿崩症」です。体内の水分量を調節する「抗利尿ホルモン」の分泌異常や、分泌されても十分に働かないことが原因です。

抗利尿ホルモンは脳の視床下部で作られ、脳下垂体に蓄えられています。必要に応じて分泌され、腎臓がそれを認識すると水分の再吸収が促されます。ところが視床下部や脳下垂体に異常があつて、ホルモンが正常に分泌されなかつたり、ホルモンの分泌は正常なのに、腎臓に障害があつて効きが悪いと、水分が再吸収できず、大量のおしつけになってしまいます。

治療は、原因に応じて、抗利尿ホルモン製剤の投与や食事療法などが行われますが、犬が好きなだけ水を飲める環境にして、水分補給を滞らせないことが大切です。

また、子宮に膿がたまる「子宮蓄膿症」でも、尿崩症が起ります。感染菌が作る毒素(エンドotoキシン)が抗利尿ホルモンの働きを止めてしまうのです。



膀胱炎 尿石症

「頻尿」症状の泌尿器系疾患にも注意!



多飲の症状はなくとも、「頻尿」が目立つ場合は注意してください。尿路に結晶や結石ができる「尿石症」、「膀胱炎」に炎症を起す「膀胱炎」、両者を併発するケースも。どちらも、頻繁にトイレに行くのにおしつけが出にくく、排尿時に痛みで鳴く、血尿、トイレ以外での粗相などの症状が見られます。

代表的な尿石症は、尿がアルカリ性に傾くときやすい「ストリルバイト尿石」や、酸性に傾くときやすい「シウ酸カルシウム尿石」など。前者は、食事を療法食に切り替えることで溶かせますが、後者は手術で取り除くしかありません。尿石症で恐いのは、尿道に结石が詰まつて尿が出なくなる尿道閉塞(オストム)で、数日で命に關ります。

これらの病気は、いったん治つても、以前の食事や環境に戻ると再発しやすいので、適切な食事、十分な水分摂取、肥満させないなどの生活管理が重要です。

蓄膿症の治療をしない限り、症状は治まりません。